

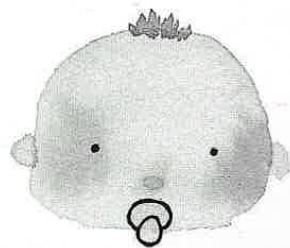
# 赤ちゃんのこころ

— 科学が教えるヒトが育つ力

●日本赤ちゃん学会理事長・同志社大学研究開発推進機構赤ちゃん学研究センター教授

小西行郎

(こにし・ゆくお)



科学が示した「自らが積極的に学ぶ」赤ちゃんの姿

二〇〇一年、私が「日本赤ちゃん学会」を設立したのは、子どもの問題が顕在化する中で、その根本的な解決方法を模索するためには、ヒトの始まりとしての赤ちゃんを科学的に研究することが何より重要だと考えたからでした。そのためには医学や心理学、あるいは教育学といったこれまで赤ちゃんに関わってきた既存の学問だけではなく、目覚ましい進歩を見せていた脳科学や認知心理学、あるいはロボティクスから複雑系までの異分野研究を融合した新しい学問領域を創出する必要があると思いました。いまでは「赤ちゃん学」は、ある程度社会にも認知されるようになり、学

会内での共同研究も際立って進歩してきました。ここで少し、「赤ちゃん学」が明らかにしてきたことをご紹介したいと思います。

まず、発達認知心理学や脳科学は、物言えぬ乳児の脳機能の解明に大きな変革をもたらしました。視線計測装置や多チャンネル脳波計、近赤外線を用いた脳血流測定や機能的MRIなどの計測機器の進歩は、それまで考えられていた以上に、新生児の視聴覚認知機能が優れていることを明らかにしました。

例えば、新生児が母国語と外国語を聞き分ける、自分の母親の母乳の匂いをかぎ分ける、といった報告が相次ぎ、多くの人が無意識のうちに信じていた「白紙状態で生まれ

てくる無力な赤ちゃん」という概念を覆したと言えるでしょう。それだけでなく、音楽、言語、数学などの分野におけるスタートアップ・プログラムといわれる学習能力が、生まれつき備わっていることが明らかになり、「教えられることによって発達する赤ちゃん」ではなく、「自らが積極的に学ぶ赤ちゃん」の姿が見えてきました。

胎児には「こころ」があるのか？

では、ヒトの「こころ」はいつごろ生まれるのでしょうか。それに答えるためには胎児から研究しなければなりません。近年、超音波診断装置などを使った研究によって、胎児行動の研究が大きく発展しました。まず、胎児期の感覚・知覚機能についての研究が行われてきました。二十世紀の半ばには、胎児における触覚の存在が判明しました。指しゃぶりなど自らの手を使って身体を触るという接触行動について、触覚が最も敏感な部位同士を触れ合わせるものということも明らかになると同時に、触覚が五感の中で最も早く出現することが分かりました。その後、聴覚や味覚、視覚や嗅覚などの発現も、すでに出生前に見られることが明らかになってきたのです。

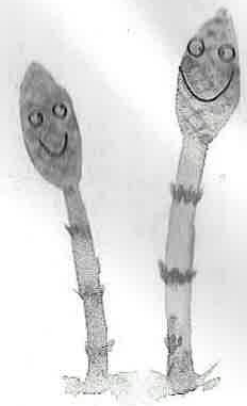
こうした研究成果をもとに胎児行動のシミュレーションなどが行われるようになった結果、指しゃぶりといった胎児の接触行動が、自らの身体を認知するための行動であるということが分かってきたのです。また、3D超音波診断

装置は、胎児の表情や行動などを詳細に捉えることを可能にしましたが、それによると、笑顔だけでなくさまざまな表情が出生前に出ることが確認されました。

生まれて間もない赤ちゃんは自ら他人に笑い掛けますが、天使の微笑みといわれるこの行動を目にすると、ほとんどの人が幸せな気持ちになるのではないのでしょうか。大人が思わずイライラする泣き声は、自分の存在を周りの人に無理やり気付かせようとしている行為かもしれません。つまり赤ちゃんは、生まれる前から周囲の人へ自ら働き掛けをし、周囲の人との絆をつくらうとしているのです。

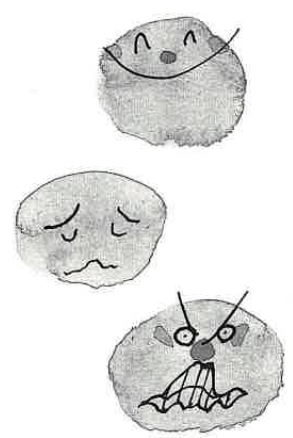
一方、こころの存在を語ろうとすると、赤ちゃんが覚醒しているのかどうか重要となります。胎児が起きているのか寝ているのかについては、眼球運動や口唇運動の研究を中心に研究が行われてきました。その結果、出生直前の三十八週ごろにはウルトラディアンリズム(数十分から数時間周期の睡眠のリズム)が存在することが分かっていたのです。それまでの胎児は、覚醒・睡眠といった区別は困難な状態にあり、ほとんど寝ていて、刺激によって時に覚醒するような状態であるといってもいいのかもしれませんが、三十八週ごろによくそのリズムが出来始め、覚醒状態が出現しているというわけです。

胎児が五感によって周囲からの刺激を受け止め、自らの身体を探りつつ認知し、覚醒しているということは、その時期にこころの一部が出来始めていることを示しているの



かもしれません。

しかしながら、母体との関係については、母体が胎児の重要な環境であることは事実であっても、胎教や胎児期の親子の絆についての研究はまだあまりないようです。胎児と母体については、当然のように「一つのころ、二つのからだ」と言われ、母親が幸せであれば胎児も幸せであるとか、母親がストレスを感じると胎児もそうであるという説が信じられてきました。ストレスについてはその可能性はあるようですが、どの程度の強さのストレスがどれくらい続くと胎児に影響するのかについては明らかになっていないようですし、さらに母体の幸せ感と胎児のそれとの関係について証明した研究はほとんどないようです。もともと、胎児が幸せを感じているというのは、どういう状態を



意味するかさえまだ明らかにされてはいません。そんな中、ヒトのこころの起源に迫る研究として、四年前に始まった文部科学省科学研究費新学術領域研究『構成論的発達科学』は、世界で初めて産婦人科、小児科、精神神経科などの医学研究と発達障害当事者研究とロボティクスを含む情報工学などの研究者が、共同で胎児からの発達原理とその障害の発生メカニズムについての研究を行っています。こうした研究が進めば、赤ちゃんのこころの発生・発達のメカニズムにも迫ることができるかもしれません。

「与える・管理する・教える」が阻む子どもの成長

赤ちゃん学研究は、このようにして、自ら動き、自ら触って周囲を探索し、学習し成長する赤ちゃん像を私たちに

気付かせてくれました。それは、一人の独立した存在としての赤ちゃんを明らかにしただけでなく、それゆえにその人権も守ろうという主張に繋がります。

ところが、現代の育児観は逆行しているような気がしてなりません。語り掛け育児にしても、ベビーマッサーやベビーサインにしても、保護者が赤ちゃんに何かをしてあげるべきであるという主張であり、「与えることこそ重要である」という価値観が広がっています。赤ちゃんは言葉の意味こそ分かってなくても、語り掛けてあげれば愛情は伝わると感じている母親は少なくありませんし、育児専門家も適切な抱き方を教えるより、愛情を持って抱きなさいと指導します。「与えることこそが重要である」という考えに問題はないのでしょうか。

最近増大しているといわれている育児不安についても、与えなければならぬという育児観が、「まだ十分に与えていないのではないだろうか」という不安を保護者に植えつけているせいで起きているのかもしれない。虐待や発

達障害などが急激に増加しているという情報もまた、保護者に大きな不安をもたらしています。もちろん、的確な情報を発信することは重要なのですが、いたずらに不安を与えるような情報には問題があります。

赤ちゃんは、自ら周囲を探索し、情報を整理し、自分の能力を活用して学習するのだから、赤ちゃんの力を信じて少し離れたところから見守るだけでいい、赤ちゃんの育つ力を信じて待とうという考え方からは過保護は起こりにくいような気がします。

新生児・乳児期だけではありません。幼児期や学童期においても、大人の価値観や理屈が子どもたちの世界に入り込み、与え、管理し、教え込もうとしている状況が進んでいるようです。そんな中で、子どもたちの自由と自主性は阻害され、妙に聞き分けがよいだけの子どもを量産しているように感じられます。与えることが本当に子どもたちのためになっているのか、大人こそ自分をコントロールする術を学ぶべきではないでしょうか。



小西 行郎 (こにし・ゆくお) 日本赤ちゃん学会理事長・同志社大学研究開発推進機構赤ちゃん学研究センター教授。一九四七年、昭和十二(香川県生まれ。京都大学医学部卒業。八八年、福井医科大学小児科助教授。九〇年、オランダ、フーロ・ニンゲン大学に留学。二〇〇一年、東京女子医科大学に乳児行動発達学講座を開設し教授に就任。同年、「日本赤ちゃん学会」を立ち上げる。〇八年より同志社大学赤ちゃん学研究センター教授。一三年より兵庫県の子ども医療センターのセンター長に就任。主な著書に、「赤ちゃんの脳科学」「発達障害の子どもを理解する」(集英社)、「赤ちゃんのしくさBOOK」(共著・海竜社)、「はじまりは赤ちゃんから」(赤ちゃんとママ社)、「今なぜ発達行動学なのか」胎児期からの行動メカニズム(診断と治療社)など多数ある。